

ESSAY いたずら

倉元 信行

7

新聞配達

母の涙を見た、忘れられない二つの思い出がある。

最初は小学校5年生の時のこと。

季節は思い出せないが朝から細かい雨が家の前の国道を濡らし、学校から帰ってきた私は家の中でひとりぼんやりと過ごしていた。

そろそろ晩御飯かなと思いついたころ、濡れたあごにひげを伸ばした父が帰って来た。なんだか少しみすぼらしい格好の父にお帰りなさいの声をかけた時には、しばらく父を見かけなかった事など少しも気にならなかったのだが。

その日の夜、裸電灯の下にぼつんとひとりで座っている母の姿があった。

「お父さんがね、死のうと思うて津屋崎の洞窟に行つたけど、どうしても死にきれんやつたって」

母の言葉の瞬間、私は何がなんだか分からなくなり、ただ突然出てきた「父」と「死」という言葉に体が冷たく張り付いた。

私たち家族は、福岡県宗像郡のJR福岡駅前にあった二階建てのかなり大きな家に住んでいた。

このあたりは、福岡と北九州の間に位置するので今は両市のベッドタウンとして発展しているが、当時の福岡駅は宮地嶽(みやじだけ)神社の最寄駅として知られていた。また夏休みになると、福岡海水浴場へ向かう色とりどりの家族連れで駅前には賑わいを見せていた。

旅館として建てられたというこの家で、小倉にあった歯科医専を中退してきた父は、せんべい、駅弁、アイ

スクリームなどの製造販売をつぎつぎと手がけた。

祖父から引き継いだ博多せんべいや駅弁の製造は儲かった時期もあったらしいが人を使つての商売は父には向いていなかったようだ。

大衆食堂をやり、最後はとうとうマージャン屋にまで変身したが、結局どれもうまく行かず相当の借金を背負っていた。母の話によると、さらに知人の連帯保証の借金まで負わされていたという。

私を頭に4人の兄弟は未だそんな事情を思ひやるほどには成長していなかった。

「お母さん、新聞配達をやりたい」

あの涙の翌日だったか、その次の日だったろうか、そう母に言いだしたのは。

うちはお金に困っているんだから自分も何かしなくては。そういう一心だった。

百メートルほど下つたところにある新聞販売店を母と訪ねた。その奥さんが、じゃあ手始めにと、自分の配達している一部を譲ってくれることになり、早速翌日から私の新聞配達が始まった。

小学校から帰ると近所の数十軒の家に夕刊を配るのが日課となった。一軒当たり月にわず

か30円のお金であったが、自分で稼ぐということに妙な満足感を覚えた。

ソ連の人工衛星が初めて地球を回ったという一面の大きな記事を見た時、「すごいぞ早くみんなに知らせたい」と小走りになったのは6年生の時だったと思う。

この直後、父は家で何度か血を吐いて闘病生活に入り、1年半を隣の古賀町にあった結核病院で過ごすことになる。

咳き込んだ父が新聞紙に吐いた血の色はとも鮮やかだった。

中学校に入ると朝刊も配るようになっていて、範囲もずいぶん広がっていた。私の姿を見てか、母も一緒に配達を始めた。

午前5時。

「じゃあ気をつけてね」

「うん」

いっぱい新聞を積んだ二人の自転車は、それぞれの道をたどって行く。帰ってくる私はまた、学校ぎりぎりの時間まで布団にもくまり込むのである。

冬の晴れた寒い日には、いつも天上に明るく輝くオリオンや北斗七星があり、家にたどり着く

頃には、それは大きく傾いていた。星はみんな友達だった。

いやなのは犬だった。いつものあの道にあの犬が必ず待ち構えている。ウーツと唸って身構えている。犬年なのに、この頃から私は犬があまり好きではない。

この新聞配達は、中学校の卒業直前に、わが家が火事で焼け落ちるまでの4年余り続くことになる。

